

は位置づけず、問題のある状態が「けがれ」であり、解決すると「けがれない血」として扱われるため、宗教的概念としての「けがれ」ではなく、病態や症状の一部を示すため便宜的に「けがれ」の語を適用している可能性がある。また月経期間を「けがれ」ではなく「望ましい子供を授かるための準備期間」と位置づけており、そこで提示される禁止行為の説明にはインド独自の「輪廻」を背景とした因果関係の考え方から影響を受けていることがわかる。これらの記述から医学書における血の「けがれ」とは、出血を伴う月経や出産を実際に経験する女性に付随あるいは内属するようなものではなく、「望ましい子供の誕生」を阻害する要因を指していたことが考えられる。

インド医学書は現代医学の視点からも非常に緻密な観察力を想定させる詳細な症状分析の記述が多く見られるが、同時にインド社会独自の世界観に基づく解釈を含んだ記述も混在する複雑な体系で構成されている。インド医学の解明や理解には、その背後にあるインド社会の状況や思想への理解が不可欠といえよう。

翻訳された理想の女性像

——叙事詩『ラーマーヤナ』をめぐる——

榊 和良

聖仙ヴァールミーキに編まれ、三世紀頃に現存するような姿をとつたとされるインドの国民的叙事詩『ラーマーヤナ』の特徴のひとつは、神話性が深められるにつれて、主人公のラーマがヒンドゥー教の主神に加えられたことにある。妻のシーター

も、女神ラクシュミーや、タントリズムにおけるシャクティ(女性的原理・生成力)と同値されるようになり、ヒンドゥー・ダルマ社会における理想の女性像から神格化されていた。

この作品は、サンスクリット語テキストだけでも様々な伝本をもち、インドにおける近代諸語に翻訳・翻案されただけでなく、近隣諸国や中央ユーラシア、とりわけ東南アジアに伝えられ、中国や日本にも伝播して変容を遂げた稀代の文学作品である。イスラーム系言語でもペルシア語による翻訳や翻案は三十種類以上も確認され、もうひとつの国民的叙事詩『マハーバータ』に劣らず人気があったことを示している。

ムガル皇帝ジャハーンギールの時代に、インド生まれのスーフィー詩人マシーフによりマスマナヴィーの形で著されたこの作品は、自らの宗教文化的背景に照らしてこの叙事詩をどのようにとらえたのかを垣間見せてくれる。マシーフは、神への祈禱、預言者への讃美、自らの導師や皇帝ジャハーンギールへの称賛などを述べた後、「妬み深い者たちへの非難」と題した節で、この物語を語り出すことが異端視されないようにと、アブラハムの逸話を引き合いに出して、物語が異端なのではなく、偶像崇拜者たちを説得するための対話であると語る。皇帝アクバルの時代に、『ラーマーヤナ』の散文訳を命じられたバダーオーニーと同様に、異教徒の聖典を翻訳することへの非難への恐れを感じていたのである。

マシーフの翻訳の特徴は、「ヒンドゥースターニーのパレット」にイラン的な要素を描いた作品」と評価されるように、民族英雄叙事詩やロマンス叙事詩の主人公として預言者と同等の人

気を博したペルシア古典文学の中で神格化されたイスラーム以前からの英雄たちを、訳文中に縦横無尽に引き合いに出して、ムスリムの読者にも親しみをもたせているところにある。また、スーフィー的叙事詩の比喩表現も多用され、聖典視するヒンドゥー教徒の側からは、単なるロマンス叙事詩に改変されたと誤解を生む原因ともなっている。

第六篇「戦闘の巻」におけるラーヴァナに誘拐されていた間のシーターの貞潔を証明する「火の試罪」をめぐる、高貴な家系の名誉のためになされた戦闘でシーターを救出したと言いつつも、夫以外の男の家で暮らし、その膝の上で支配され、邪なまなざしにさらされた妻をそのまま受け入れることは、世間の非難の的になるといふ恐れからできないというラーマの離縁のことは、マシーフにはマジヌーンのような嫉妬心と弱き心と映る。

その一方で、シーターの大地の女神の娘としての高貴な生まれへの自負や、夫に貞節を尽くし誠実であった姿を評価しないラーマへの不満や公衆の面前で離縁されたという不名誉への抗議のことは雄弁さは、自ら「火の試罪」を実行するという意志の強さを描きつつも、美しい詩の中にかき消されてしまっている。だが、偶像崇拜者らに警告して火に投げ入れられても冷たくなった火により救われるアブラハムの姿に重ねられ、マルヤム(マリア)の本質をもつシーターの純潔や誠実さゆえに、火の中から現れ出る「命の水」に救われる愛の対象となる高貴なる美として試罪の炎の中に描き出される。

シーターは、浄化儀礼を受け入れる伝統の中で、イスラーム

以前から残る女神のイメージを残したペルシア古典文学の女性像に共通性を持ち、英雄的人間としてのラーマの妻であり、敬愛されるべき女性像としてペルシア語叙事詩の手法を生かして描かれたのである。

ヒンドゥー教寺院の内陣について

出野 尚紀

寺院の内陣を指し示すガルバ・グリハ *garbha-grīha* は、建築論書においてどのように記述されているのだろうか。また、寺院の中心として聖性をもっとも高い部分だが、どのように聖性を高めるのだろうか。それらについて、北インド系で六世紀の『プリハット・サンヒター』*Bṛhatsamhitā*と十一世紀の『サマランガナストトラダーラ』*Samāṅganaśāstradhara*に南インド系の『マヤマタ』*Mayamata*の三文献を比較検討した。

土の埋め戻しや水の吸収具合などによって、土地の適不適を確認し、各ヴァルナに適した場所の特徴を確認し土地を選定する。儀礼段階として、土地を浄化するための儀礼であるヴァーストウ・プージャー *vaśtu-pūjā* を行う。

ガルバ・グリハについての具体的記述を見る前に、寺院の立地と構造を見ておきたい。浄性が高い場を選定することが場の聖性を高めることにつながると考えるからである。そして、本殿である祠堂が寺院全体のどの位置になるかを調べるために、どのように構成するかを確認したい。これは正式な入り口からの方角と距離、全体のなかのどの部分に存するか、また、他の